市長あいさつ

下野市長　広瀬寿雄

下野市は、核兵器の廃絶と世界恒久平和の実現を願い、平成１８年６月１６日に「非核平和都市宣言」を行いました。また、世界でただ一つの被爆国の国民として、戦争や原爆の記憶を風化させることのないよう、平和行政の推進に取り組んでいます。

今年は、広島・長崎の原爆の悲劇から６９年が経ち、戦争を体験した方々が少なくなり、被爆者健康手帳の保有者は２０万人を割り込みました。人口の約８割以上が戦後生まれの戦争を知らない世代となっている中で、戦争の悲惨さ、核兵器の恐ろしさ、平和の尊さ、生命の尊厳を後世に永遠に語り継いでいくことは、我々にとって重要な責務であると感じています。

中学生平和研修派遣事業は、非核平和都市宣言の推進及び平和学習活動の一環として、市内の４つの中学校から生徒を広島に派遣するもので、本年度が第１回目となります。

生徒たちは各学校の代表として、平和記念式典へ参列するとともに、各学校の全校生徒が平和の祈りと戦争の犠牲になられた方々のご冥福を祈り折った千羽鶴を「原爆の子の像」に奉納しました。

また、広島平和記念資料館・原爆ドーム・原爆死没者慰霊碑などの見学、被爆体験講話の受講、灯ろう流しを体験し、その中で生徒自身の「目」、「耳」そして「心」で感じ、「平和の尊さ」、「生命の尊厳」、「平和を愛する心」を学び、恒久平和への理解と認識を高めていただいたことと思います。

派遣後は各学校において報告会を実施し、広島で見て聴いて学んできたことを生徒たちみんなに伝え、平和の大切さを共有するとともに家庭や地域においても、機会をとらえ、さらに次の世代へ伝えていってもらえるものと期待しています。

最後に本事業にご参加いただきました生徒及びその保護者の方々、また、事業実施に向けてご協力いただきました多くの方々に心から御礼申し上げます。

派遣団団長報告

下野市中学生平和研修派遣事業報告

団長　川又　俊郎

今年、第１回目の下野市中学生平和研修派遣事業が実施されました。これは、次代を担う中学生を、毎年８月６日に行われる広島平和記念式典に派遣し、現地での体験や見学等を通して、被爆の実態や核兵器廃絶、世界の恒久平和の実現にむけての願いを肌で感じてもらうためです。

平和教育の一環として、６９年前ほぼ爆心地近くで被爆した当時中学２年生の國重昌弘さんの話を聞きました。「今までは被爆のことはほとんど口にしなかった。でも、あの悲惨な出来事を風化させないためにも、本当の戦争の残酷な姿を知って、考えてほしい。」と前置きをして、１才後輩の中学１年生が目の前で亡くなる、あまりにも凄絶な体験をお話しくださいました。

４３年ぶりとなる本格的な雨の中、被害者や遺族そして平和を願う派遣団約４万５千人が式典に参列しました。松井市長の平和宣言の中で「戦争文化」ではなく「平和文化」をつくる努力をしよう。そして、核兵器も戦争もない平和な世界のため、被爆者とともに行動しようとを呼びかけていました。こども代表からは「小さな事からはじめる。そして、私たちは、もう行動をはじめています。友達を大切にし、優しく接しています。」と力強く訴えていました。

「平和学習にアレルギーがある子は多い。」と聞ききます。でも、いつか被爆体験を聞けなくなる危機感はあります。この平和教育で学んだ子どもたちが各学校へ持ち帰り、クラスから、学校から、そして下野市から「平和の尊さ」を考え、行動してほしいと思います。また、我々大人は、そういう心豊かな生徒を一人でも多く育て、この日本が恒久平和な国にすることが責務だと思っています。

我々派遣団に貴重な機会を与えて頂き、更にご支援くださいました広瀬寿雄市長様、池澤勤教育長様、蓬田優総務部長様、ほか多くの関係者の皆様に感謝申し上げます。団員を代表しましてのお礼並びに報告とさせていただきます。ありがとうございました。

・・ヒロシマを知ることは、未来を考えること・・

を合言葉に、平和教育をさらに推し進めていきましょう。

派遣団員報告

下野市中学生平和研修派遣事業に参加して

南河内中学校　二年　大沼　里美

今夏、あの出来事から６９年を迎える広島の地に、私は初めて足を踏み入れた。

まずは、路面電車に乗って平和記念公園に向かった。人でごった返す電車の中から外を見て、まもなく感動した。道路脇を見渡せば、店だらけで東京のようだったからだ。人々の努力があれば、こんなにも変われるんだ、と感じた一幕だった。その後雨の中、広島平和記念資料館まで歩いた。被爆体験者講話では、国重昌弘さんの話を聞いた。実際に、ケロイドの傷跡を見て、当時の様子をイメージすることできた。資料館では、主に実物や模型を見た。特に印象に残ったのは、忠実に再現された原爆ドーム。所々黒くなっていて、鉄筋がむき出しになっているのを間近で見られたからだ。他の展示物も、当時のままの状態で置いてあり、原爆の凄惨さを物語っていた。一方で、滞在中毎日その横を行き来した原爆ドームは、不思議なものが突き刺さっていたり、不思議な形をしていたり、不思議な面が多すぎて、何度見ても感慨深いものだった。そして、一番興味深く、自分が積極的に参加したかった平和記念式典では、涙腺が緩む出来事が二つあった。一つは、一列前の席に座っていた二人組の男性外国人の行動だ。その二人は、式典が始まる前は、大きな声でヘラヘラ笑いながら話をしていた。しかし、式典が始まると、急に背筋を伸ばし、黙祷も行い、ひろしま平和の歌まで口ずさんでいたのだ。陽気な外国人がそこまで真面目になるとは思ってもいなかったから、とても衝撃的だった。二つ目は、こども代表の平和への誓い。特に心に残ったのは、「悲しみや苦しみの中で、生きることへの希望を見つけ、生き抜いた人々に感謝します。」二人とも堂々と話し、強調して言っている所があり、大変心にグッと来たのを覚えている。夕方に行われた灯ろう流しは、灯ろうを流す多くの人で賑わっていた。夕方の時点でも綺麗だったが、夜になると、とても幻想的な世界を作り出していて、もっと綺麗だった。私の灯ろうは、平和への願いを乗せて夜の川へ流れていった。最終日は、平和記念公園に行き、原爆の子の像に千羽鶴を捧げた。物凄い数の千羽鶴があり、その綺麗さと多さに圧倒された。

私は、今回の派遣事業に参加して、様々なことを学んだ。特に痛感したのは、平和を願うのは、万国共通である、ということだ。私が広島で見た外国人は１００を超えるだろう。日本国民の想いが海外に伝わっている、と思うと、この体験がどれほど貴重だったかを改めて強く感じさせられた。今回は、各校男女一人ずつで、他校の友達ができるかとても心配していた。でも、女子三人が気さくに話しかけてくれて嬉しかった。この三人がいなかったら、つまらなかっただろうな、と思うと友達のいる私は幸せ者だなと感じた。そして、この記念すべき派遣事業一回目に、リーダーとして、下野市の代表として参加できたことを誇りに思い、この体験を多くの人に伝えていきたい。

平和への誓い

南河内中学校　二年　板子　優太

僕は、今回の派遣事業で平和の尊さが一番、身にしみています。
被爆者の話を聞いてとても、生々しくて恐ろしくなりました。たった一発の原子爆弾で罪なき人まで殺され、今もまだ核爆弾などを持っていること考えると、大変恐いです。手足はただれ、水を重傷者にやったら死ぬぞと言われたと聞いて、耳をふさぐ気持ちでした。そんなことは絶対将来おきてほしくありません。今、話題の集団的自衛権も日本がまた、同じ過ちを繰り返そうとしてるようで、気が気でありません。もう二度と戦争をしてほしくない、そんな強い思いが芽生えました。

平和記念式典に出席し、日本だけでなく世界でも、平和に関心が高かったことが分かり、平和について世界の人々が考えていることがわかりました 。特にこども代表による誓いが一番心に残っています。「小さなことから始めてほしい」の言葉を重く受け止め、小さなことをみんなでやり、大きなものへと変化させたいです。そして、大人になっても、今回感じたたくさんのことを、周囲の人たちへ、これからの未来へ伝えたいと思います。

灯籠流しで見た一つ一つの灯籠は被爆者の魂のようにも見えました。僕は、灯籠に平和への強い思いと被爆者への哀悼の意を捧げました。もう、二度と戦争をしないという気持ちを胸に抱きながら流れていく灯籠を見つめました。

僕が今回、学んだことは、とても大事なことで絶対に忘れてはいけないと思います。

僕はこのことをたくさんの人に伝えこの悲惨な出来事を自分達の世代へと受け継ぎたいです。そして今度は、日本だけでなく、世界へと発信できればいいと思います。

学校祭などの行事を利用してたくさんのことを訴えたいです。みんなで戦争について語りあえる時間を作りたいと思います。この世から争いごとやもめ事がなくなればいいと思います。今も内戦や戦争の起こっている国へ、人間が人間を苦しめることが無意味なことであるとわかってほしいです。

これからも、平和な世の中が続くように、自分ができることをやっていこうと思います。そして、今回の体験は、市長さんを始め、教育委員会や市の総務課の方々、先生方、保護者の皆様のおかげです。様々な方々への感謝の気持ちを胸に、これからたくさんのことを伝えていきたいと思います。

広島派遣に参加して

南河内第二中学校　二年　牧野　由依

私が平和研修派遣事業を通じて一番知りたかった事は、原爆被害を受けてから６９年経った広島の現状でした。予想ではまだ所々に原爆の爪痕が残っているのだと思っていました。しかし、広島駅を出た瞬間に、予想とはかけ離れた光景を目の当たりにしました。広島の街は賑わっており、外国の観光客の方もたくさんいました。しかし、原爆ドームのある平和記念公園だけは、周りとは異なるムードに包まれていました。建物の骨組みが生々しく見える原爆ドームは、戦争や原爆を知らない私にもその悲惨さと人間の過ちを無言で語りかけて来ました。

初日に見学した広島平和記念資料館には、原子爆弾の炸裂による熱線や爆風によって、本来の形を失った実物がたくさん展示されていました。原爆ドームを含めたそれらのものは、見るだけで原子力爆弾の恐ろしさを知ることが出来る貴重な物だと思います。

また、派遣２日目の８月６日の夜に体験した灯ろう流しには、老若男女はもとより多くの外国の方が参加していました。予想をはるかに超える人々が集まっていたため、川に流された灯ろうは美しさと共に、迫りくる迫力さえ感じました。灯ろうに書いた言葉は皆それぞれ違うかも知れないけれど、平和に対する思いは同じであると信じたいです。

３日間の滞在中に私が一番驚いたことは、平和記念公園の中に、東日本大震災の復興のための募金箱が設置されていたことです。６９年前に被災地となったこの地で３年前に被災した地域への支援が始まっていること、そして募金が集まっているなんて思いもしませんでした。とても衝撃的でした。今回の広島で学んだり驚いた事はそれだけではありません。平和のためにやらなければいけない事を考え、行動に移すきっかけにもなりました。　まずは　普段の生活から 出来ることを始めたいと思います。

平和への一歩を踏み出すために

南河内第二中学校　二年　小泉　亜門

私は平和派遣団に参加し、はじめて平和記念式典に出席した。毎年照りつける真夏の太陽は姿をかくし、四十三年ぶりの雨の式典となった。

式典では世界各国から人々が集まり、静かに共に原爆犠牲者の冥福と平和を祈った。日本国内のみならず、各国の多くの方々が参加している姿を見て、原爆についてその関心の高さが窺えた。

平和記念資料館で見た黒こげの三輪車・弁当箱、それから人影の石。海外の方々は六十九年前に起きた事を疑いながらも真剣な眼差しで見ていた。被爆体験者の國重さんは、爆心地から二キロメートル離れた場所で被爆し、十数キロメートル離れた自宅まで困難の末帰宅した。皮膚は溶け、顔は鼠色に腫れ上がりその後も消えない傷で苦しめられた。しかし、米軍のB―二九爆撃機の乗組員の一部は、

「原爆は投下してよかった」

と答えたそうだ。彼らは軍の指示に従い、戦争を早く終結する為に落としたが、軍は他の方法を考えはしなかったのかと疑問が残った。

そのような惨禍があっても広島はめげなかった。水道は一日も止まる事が無く、市内の路面電車は三日後に運行を再開した。戦後六十年草木も生えないと言われた街が、六十九年ですさまじい発展を遂げた。これは市民が一丸となって復興へと努めた成果だと思う。

今、被爆者の平均年齢は七九．四四歳で八十歳目前となっている。原爆の恐ろしさ、悲惨さを伝える語り部の方々が高齢となり、年々語り継ぐ事が難しくなってきている。唯一の被爆国に生まれた私達は、語り部の方々の意志を引き継ぐ伝承者となり、後世や海外に向けて伝えていく責務があると思う。世界が平和に向けて一歩踏み出すために、一人一人ができる小さな事からはじめたい。

広島へ行って感じた事

石橋中学校　二年　堀尾　海南江

私は写真では伝わらないものを広島へ行って感じとるという事を目標にして行きました。そして実際に原爆ドームや資料館に展示してある物を見て写真と比べたら形や色は同じだけど迫力は全く違うと思いました。

原爆ドームは焼け焦げた壁や熱で曲がった鉄骨がとても生々しかったです。資料館には熱線でボロボロになった服や亡くなった方の遺髪などたくさんの物が展示されていました。原爆に関するものがありましたが、今でも一番心に残っているものが２つあります。

１つは真っ黒に焦げた弁当箱の中身です。当時は食べる物がとても少なく、芋や麦、米などを混ぜ合わせた物を母親が作り子供に持たせました。しかしこの弁当は一口も食べられる事なく焼けてしまいました。この弁当の持ち主だった子供は弁当箱をお腹に抱きかかえたまま遺体で発見されたそうです。私はこの真っ黒に焦げた弁当箱を見て、原爆は目に見えるものだけを壊すのではなく目に見えない愛情も壊してしまうのだと思いました。

２つ目は被爆直後の人を再現した人形です。背景には焼け野原になった写真があり爆風で崩れたレンガの壁の横には男の子と大人の女性の人形がいました。その２体の人形の髪の毛はチリチリになり服は穴が開き真っ黒に焦げ、顔は灰色に腫れ上がっていました。腕は高熱でドロドロに溶けて肘から指先まで垂れ下がった状態でした。この人形は一度写真で見た事がありましたが実際に見ると、深い悲しみがこみ上げてきました。当時このような人が何人もいて苦しみながら亡くなっていったと思うと、なぜ罪の無い人達が殺されなければいけないのだろうという思いが強くなりました。

私は実際に行って生きる事への嬉しさ、喜び、幸せを忘れてはいけないと感じました。生きたくても生きることができなかった人がたくさんいるので自分が今もこうして平和に生きていることに感謝しなくてはいけないと思います。

皆さんは苦労することや大変な思いをするときもあると思いますが、原爆で亡くなった方々へ私たちが出来る事は今を精一杯生きる事だと思います。だからぜひ生きる事への感謝を忘れないようにしていきたいと思います。

下野市中学生平和派遣団に参加して

石橋中学校　二年　梅山　大輝

今回、下野市中学生平和研修事業に参加して、戦争の悲しみ、悲惨さ、平和の尊さを学ぶ事が出来ました。今は、高層ビルや立派な建物が建ち並び、路面電車も走り緑も豊かで、多くの人達で活気づいています。とても、６９年前にあんな悲惨な事があったなんて、信じられませんでした。６９年前の８月６日、午前８時１５分に一発の小さな原子爆弾により、一瞬で、広島市内が、壊滅的被害になったそうです。

平和記念資料館には、原子爆弾が投下され大きなキノコ雲の映像や、その時に人々が着ていたボロボロになってしまった服、８時１５分で動きを止めてしまった懐中時計、炭化して黒くなったご飯が入っているお弁当箱等々、思わず目を覆ってしまう当時の悲惨な状況が伝わってくる展示物がたくさんありました。原爆で、一瞬の間に亡くなった多くの人々の無念さ、心や体にたくさんの傷を負いながらも生き残り、大切な家族や友達、家を失った人々の無念・怒り・憎しみ・悲しみが伝わってくるようでした。

なぜ、日本は戦争をしたのでしょう？なぜ、罪のない人々が一発の原爆により、多くの尊い命が失われて、しまったのか、考えさせられました。慰霊碑には、今、現在２９万２３２５人の原爆によって亡くなった方々の名簿が納められており、そこには、「やすらかにお眠り下さい　もう同じ過ちは、繰り返しませぬ」と刻まれています。この言葉には、二度と同じ過ちを繰り返してはならないというとても力強い意思を感じました。原爆により一瞬にして廃墟となった広島の復興は、多くの人の努力と知恵によるものであると実感しました。

６９年前の昔は、昔の悲しみではなく、今、現在、未来へと語り続けていかないとならないと思います。決して忘れてはいけません。僕たちは、戦争を知りません。当たり前のように、温かいご飯が食べられ、布団で眠れる。当たり前のように学校で勉強が出来る事が当たり前じゃなかった事、平和は当たり前ではなかった事、昔の方々が苦労し復興してきてくれ、今在がある事に気付き感謝する事が出来ました。

核兵器のない、戦争のない世界を作るには、被爆経験・戦争経験のない僕たちが、被爆・戦争経験者の方々と共に考え、行動しなければならないと思います。核兵器は、絶対に使ってはならず、広島・長崎と同じ悲劇を繰り返してはならない。戦争は、憎しみ・怒り・悲しみしか残りません。一人一人の戦争や未来に対

する考えや見方は、日本・世界のこれからの未来を決める事なのだと思います。６９年前の終戦から、日本は、平和への道を歩んできました。今、集団的自衛権が可決され、昔のように、また戦争への道を歩んでしまわないか、不安です。日本・世界の各国が平和への道を歩んでいって欲しいと思います。もう二度とあんな過ちを繰り返さない為に、もう一度、平和の尊さを考えて欲しいと思います。

　最後に、被爆経験を聞かせてくれた、高橋久子さん、國重昌弘さん、下野市長をはじめ、下野市職員の方々、平和事業団団長を努めて頂いた川又校長先生、多くの方々のおかげで、貴重な体験が出来ました。ありがとうございました。この経験を生かして、多くの人に平和の尊さ・戦争の悲惨さを伝え行動していきたいと思います。

平和を願って

国分寺中学校　二年　檜山　杏奈

私は、平和研修派遣事業に参加する事ができ、教科書で学んだ以上の、多く事を学べました。

被爆体験講話会では、当時、今の私と同じ中学二年生で学徒だった國重さんの話を聞くことができました。國重さんは、ケロイドになっている、やけどの傷跡を見せてくれました。熱さや痛みがその傷跡にまだ残っているように見えました。草刈りをする前の朝礼の時に原爆にやられたと言っていた國重さんは、

「私が今まで自分の体験した話を話そうとしなかったのは、亡くなった人達に対して、申し訳ないと思っていたからです。」

と、言われました。

私は、原爆の被害にあって、生き残ったことがすごく幸運な事、嬉しい事だと思い込んでいたので、その思いを知って、とても自分が恥ずかしくなりました。

「なくなった人に対して、自分が生きている事に、罪悪感を感じてしまう。それが戦争なんだ。」

と、知りました。

「被爆された方が体験談を話してくださる事、私達がその話を聞くという事は自然な事、簡単なことではないのだ。」

と、思いました。

平和祈念資料館の見学では、原爆後の町の様子や被害にあった人達の写真や遺品などを沢山見ました。ボロボロになった服や、灰色と黒の混ざったような色をしたこげた遺品を見た時、その物の質感や匂いを感じました。

「こんなに？こんな風になっちゃうの。」

と、何度も何度も思いました。

とても辛く、衝撃的でした。戦争の残酷さ原爆の被害の大きさを知り、

「もう二度とこんな事はしてはいけない。」

と、強く思いました。

平和記念式典では、平和を願う人達の空気を体感し　また、スピーチを聞くことでその思いを実感しました。

私は、灯篭流しの紙に、

「平和祈願～いつまでも平和が続きますように～」

と、書きました。

広島で体験した事、感じた事を思い出し、広島、日本、世界のために平和であってほしいと強く思ったからです。川全体を見下ろした時、沢山輝く灯ろうに感動しました。天の川の様に流れ、一つ一つが温かく光って見えました。また、多くの外国人の姿を目にし興味を持ってくれている事を知り、うれしい気持ちになりました。この事業に参加し、これからの自分にできる事は何かを考え、探る三日間となりました。家族や友達学校の仲間、地域の人達に、学んだ事、感じた事を話し伝える事、人を思いやる事、家族を愛する事、友達を大切にする事、今、私が出来る事を実践していきたいです。

平和とは何か

国分寺中学校　二年　大出　甲斐莉

今回の平和研修派遣事業では、多くのものを感じ、多くのことを学び得ることができました。

広島駅に着き外へ出てみると、原爆が投下され町が焼け野原になったとは思えないほどの都会で、まるで別世界でした。ここまで復興したんだと改めて実感しました。そうして、広島市内を歩いていると、目に飛び込んできたのは、あの原爆ドームでした。テレビや写真で見るよりも生々しく、人間の愚かさや、被爆された方々の声、亡くなった方々の思いが、目に、心に、体に、焼き付けられたような感じがしました。また、原爆資料館では、原爆ドームで感じたことが形となって現れました。黒く焼けてしまったお弁当や、亡くなった方の遺髪、爪、皮膚など想像を絶するものが展示されており、悲しみとしか言いようがありませんでした。

被爆体験講話会では、國重昌弘さんという方から話を聞きました。國重さんは、僕たちと同じ中学二年生のときに被爆された方で、僕が國重さんだったら・・・、という気持ちで話を聞くことができました。國重さんは、自分の体験したことを若い世代の人たちへと伝えていくために、僕たちに語りかけるように話してくださいました。原爆が投下されたことを風化させたくないという気持ちが伝わり、僕もより多くの人にその思いを伝えたいと思いました。

他にも広島には、宮島の厳島神社などの観光名所や、お好み焼きやもみじ饅頭などの美味しい食べ物もあり、郷土を愛する広島の人たちの思いを知ることができました。

僕が考える平和とは、式典の中でも聞いた、「当たり前」ということだと思いました。当たり前のように水を飲み、当たり前のように食事をし、当たり前のように笑い合い、当たり前のように生きていく、それこそが、平和なのではないかと考えました。

国分寺中学校では、「当たり前のことを当たり前に」というテーマがあります。それも平和だからこそ目指せることだと思うので「平和なことを当たり前に」という気持ちで、このテーマに取り組んでいきたいと思いました。

この体験を通して、戦争の愚かさや恐ろしさを知り、倒れても立ち上がる、人間の強さと、たくましさ、そして永遠に平和を願い続ける広島の思い、日本人の願いを理解することができました。